
ちょこで とりっぷ

yukaringo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよこで とつづく

【著者】

N8951D

【作者名】

yukarin go

【あらすじ】

おなじみのちよことおバカな中学2年生、成瀬歩。バレンタインデーのチョコを食べたことで、不思議な世界へトリップしてしまいます。

第一個 始まりはバレンタインデー

何？

2月14日、朝8：00。

そう、今日はバレンタインデー。

私は誰にチョコをあげるわけでもなく、ただいつもどおりに登校した。

登校中、彼氏いない暦十四年の私をあからさまにバカにしたようなフインキをかもしだすバカップル達がいたので、私の愛犬の田村^{ブルドッグ}をバカップルの元へ離してやつた。

あ、田村は凶暴だからね。・・・というのも、田村を拾った当時にお父さんが田村に噛み付かれて病院送りになつたからだよ。

・・・うわ、またバカップル発見。

アツツ。地球温暖化の原因はこいつらだな。

私はその場から離れ、校内に入った。
下駄箱のふたを開ける。
すると中からドサドサドサ。

チョコレートだつたびよん

んで、冒頭に戻る！

・・・あのね畠さん。お分かりかと思つたが、私はおんなのじだよ。

今日はバレンタインデーで、女の子が男の子にチョコを渡す日だよ。

なのに、

あのね私、そんなに男前じゃないし、運動神経良くないし、成績はヤバいし、特別美人でもないし、図工が得意ってだけで、それ以外に何にも取り柄無いよ。

・・・・・あ、そうか。

取り柄の無い私にチヨコが届くなんておかしいなら、そひーこれ

は別の人の中駄箱！

私は下駄箱のふたを閉めた。

これ、私のやんけ！！！

それなら考えられることは一つーー！
チヨコを入れる人が下駄箱を間違えたーー！

私は、チョコレートの包装紙に書いてある宛名を見た。

宛名に・・・「成瀬歩」って…!

・・・ああ、私の名前？成瀬歩だよ。

「のちやくつて私宛て！？」

ちよ、私の乙女としての道が大ピーンチ……道が崩れていへよー。

…………あ、そうか。

「コレって、新手のイヤガラセだらへん？ どこがつて？ いや、あれでしょ。中に裁縫針とか入っちゃってたりするんだよ。

…………あひんざいひんざいねえの。

私は喧嘩を売られたが、びひつても買いたくなつたがだよ。
ね。

それって、普通じゃない？

え？ 普通じゃないって？

まあどうでもいいこよ、なんなん
じやあ、

あれー？

頭へ、ひへ、ひへ。
。

〔思春回路セシヨーテナ前〕 うたやつ?

あー・・・・・・・・ もひ、脳内で何語つてんのかさえわからんくなつてきた。

もしかしてポイズン入つてた?

さよなら現世

ここで、私の意識は消失した。

第一個 関西弁バトル

目が、覚めた。
というより、覚まされた。
誰について？

妖精。

ちょ、待つて！「あ、こいつもうダメだ」みたいな目で人を見な
いでくれ！

んで、まあ。妖精に起こされたんですよ。

ここどこだつて聞いたら「ちょこの国」って言われたもん「あ、
こいつもうダメだ」つていう田で見たら、頭をひっぱたかれました。
オマケに、

「ちよう待てやあ！なんやねんその視線は！」

とも言つてた。

まあ私もそこは冷静さを取り戻して、

「信じられるわけないや。ワシを何年生だと思つてんねん。」

「あ、すまん。ついノリで……」

「ハリで!! ハリで開拓弁はなるんか!!」

「いや困るわよ、ひかせば」

「あつほか————い！」

我慢できなくて、勢いよく突っ込んでしまったよ。

「ちょいの国なんて存在すると思つてんのかー？」のドグサレ妖精！妖精なんて口口ポツクレが限界やぞ！！

「限界先クソ先ないつちゅーねん!!! 現にワシは存在しとるわ!!

!

あ

沈黙。

そこで私は、

「あほかー空気がつらーねんー！」

またもつっここんでしました。

「うおうー？だから何でお前まで関西弁になつてるんよーノリか！？ノリなのか！？ノリが必ずしも許されるとは思つなよー！」

「やかましいねん！アーメだつて「だつて俺、王子だもん」で済ませれる世界なんだよーだからノリもセーフだー！」

「セーフつー！…エリオードがアウトでビビリまでがセーフなん！？」

「妖精」

私は、妖精に言ひ聞かせるよひに言つた。

「そこはつひにそだら負けだ。」

「ちよお待てやあー…負けるかー…負けてたまるかー！」

「待てるかあーつちこみのタイミングがお笑いの命やねんーー！」

「別にお笑いは田指してないわーー！」

「だまらつしゃー！それが出来ない奴は関西の恥やねんー！」

「関西育ちでもない奴が、何を語つとんのやー！」

「お前こそ関西育けじやないやろがーマフィア風情が何をさせー

とんのやー！」

「マフィアじやないねん！お前は漫畫の見すげやー！」

「だまつとりーそこまで言つなり地獄道やつてみこやー！」

「できんー普通にできんよーー！」

口喧嘩関西弁verを繰り返してゐる間に、本当にいつにむかへる
を忘れていた。

妖精のムキ太郎が現れた！

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ あれ？

なんか、気づいたら戦闘モードになってる。

ପାଠ୍ୟକରି?

たたかう

២០

や、どうもひと言われても・・・・・

ପାତ୍ରକାଳୀ

一
九
九
九

まほ
づ
べり

よし！殺すぞ！

ちゅ
ど
ん

ちょこの国（ムキ太郎曰く）では、漫画ちりくな爆発音が鳴り響いたと言へ。

第三個 黒ウサギ、現る

私はムキ太郎を倒した後・・・いや、どうやって倒したのかは訊かないで。

うん、まあ、ムキ太郎を倒した後、私は、からうじて生きていたムキ太郎にちょここの国のことを見た。

妖精

「ちょここの国にはな、ハーハーの女王様みたいにちょここの王様がいるんや。まあその名の通りちょここが大好物なんやけど・・・。チャーチョコレート工場みたいに、ちょこも作ってるんや。そんで、うん・・・リア 鬼ごっこみたいな感じで、「この世に私以外が作ったちょここがあるのは気にくわん!」ってなことになつて・・・」

歩

「ちよい待てやあ!なんやねんその自分勝手な理屈は!あれか!?'だつて俺、王様だもん」とか言いたいんか!?しかも、全国の佐藤さんを狩る話にちょここを交わせんなん!!--」

妖精

「まあそなんやけど、そこでちょここがめちゃくちゃ好きな人間を消していくて、大量のちょここを余らせて・・・全国のちょここ工場を潰そうつていう計画や」

歩

「ふざけんな!!なんかだんだんと佐藤さん狩りに理屈が似てきたよ!」

妖精

「そんで、ちよーじがめちやくちや好きな人間はお前だけだつてい
つじがわかつたんや」

歩

「・・・まあ、ちよーじをオカズにじ飯を食べれるくらい好きやか
らな、ちよーじ。」

妖精

「ちよーん！…確かにそんなことドセんのお前だけや…」

・・・まあそんなことじがわかつて、何故私がじに来たのかと言
う理由もわかつた。

妖精

「つまつは、ちよーじの王様をブツ殺せばひつてこひ話や

歩

「ふざけんなああああああああああああああああああああああ
あああああー！ー！ー！ー！ー！」

妖精

「気にする」とあれへんよ。ちよーじの王様なんてクサるモビーノ
んやかひ

歩

妖精

「うーん……あと250体くらいいるんやないかな」

妖精

「まあ大丈夫やろ。あとの250体はちょこの王様候補、つてい
つといいろなんやから」

妖精

「まあそこはワイ一・ウォンカ方式で、お前が王様になればいいやろ」

步

妖精

「つーか作者ー！ 何で毎度毎度ヒロインがむづかしいんだバリー又が好きな腐女子設定になつてんだよーーー！」

步

「それは作者が好きだからやろ?」

妖精

步

「まあ腐妖精は置いといて、どうやつて王様を殺すん?」

妖精

お前も殺す気満々やんけ！」

步

「だつて殺さんと帰れへんのやろ?」

妖精

「。。。」
トモササギ

步

せやから その廬 かの三の山に殺さへゆくが
んねん

妖精

「1／2・・・1 | お前、この間ねん、お前、」

步

「帰らへんと、むつきゅんとバリ様に会えへんのや」

妖精

「お前・・・・」

歩

「帰らへんと、むきゅバリのー8禁が見れへんのや」

妖精

「アホー！お前まだ十四歳やないか！何見てんねんー！」

歩

「お前みたいな年齢不詳に言われたくないわーーー！」

妖精

「何でお前、【まだ見てへん】とか否定しないねんーーー！」

歩

「何事にも素直じゃなくけやこけへんーーー！」

妖精

「マセガキが何を語つとんーーー！」

歩

「それが出来ない奴は関西の恥やー寧ろ、お笑い界の恥やーーー！」

妖精

「せやから、関西ぢでもない奴が何を語つとんねんーーー！」

再び関西弁バトルをしていると、・・・不思議の国のポリスに出てくるあのツサギがやってきた。

妖精

「お、mr・ゲームアンド時計やないか」

歩

「随分個性的な名前やな！しかも時計を英語に直したら、随分聞き覚えがあるよ！」

G & 時

「こ」これはこ」れは、あなたが人間界からやつてきた脳味噌ドグサレ腐女子さんでしたかな？」

歩

「死ね」

妖精

「G & 時！あんた紳士的な口調で何をほざいとんねん！」

G & 時

「住みません、つい本心が」

歩

「住まんて済むなら不動産いらんわ」

妖精

「お前うどこのCM担当者だ！」

G & 時

「いえ、ほんとすみません。歳なもので」

妖精

「お

「んで? G & 時がワシに何の用や?」

G & 時

「嬉しいニュースがあるんです。今日の『』飯は赤飯ですね」

妖精

「ん? 何や?」

G & 時

「250体のちょいの王様候補が死にました」

妖精・歩

「結構嬉しいけど普通は黒飯だよ……」

「…」

G & 時

「お、やめ、やめでしたか？すみません。」

歩

「…真心こもってねえな」

G & 時

「なんか言つたかクソボケ。…まあやつこいつことなんで、今からハゲジジイ…いえ、お坊さんが来てくれるやつです」

妖精

「今ものすゞ」に暴言が聞こえた気がするんやけどな・・・」

G & 時

「氣のせいですよ」

步

「そんなわけあるか！今私のことクソボケって言つただろ！アホ！」

G & 時

黙れエセ関西弁。…………さ、行きますよ、妖精さん」

・思つたこと

二つ、黒つひとつ、

ウサギ の ゲーム&トイ が あらわれた!

・・・・あ、また戦闘モードに・・・。

どうやる?

たたかう
まほう
どうぐ
なかま

せ、どうあるいて言われてもね。

じゅわん。

いります

まほう

どうべ

いけにえにわざさる

歩

「よーし、君に決めた！ 妖精、
逝け！」

「え、ちょっ」

妖精

その日のちよ一の国には、妖精の断末魔つぽい叫び声が響いたといふ。

第四個 王様来るー（早ハ）

「ひやつてかmr.ゲーム&時計を倒した私と妖精は、王様を殺す計画を練り始めた。」

妖精

「さて、ひやつて王様を殺すかやけど」

歩

「腹を引き裂いて、中から腸でも取り出せばええんやないの。そして沢に流そひ」

妖精

「ちよお待てやあ！何、青少年の教育に悪い発言しどんねん！」

が、のように私が案を出せばクソ妖精がすかさず異議を唱え、

妖精

「スプーン兵になりきつて、王様を殺しに行けばええんやないか？」

？」

歩

「えー・・・あのペラースプーン兵になりきるのは無理やん」

のよひに妖精が案を出せば、私が異議を唱えるといつ状況が続いていた。

歩

「いのままじや埒が明かん・・・」

妖精

「どうする?」

歩

「もう読者にもわかりやすく、サクッとじゅんけんで」

妖精

「随分投げやりだなあおい!...」

歩

「文句あるならお前が一人でちょこの王様をぶつ壊しに行けばいいだろ。かつ消すぞ」

妖精

「ちよー!何か妙に圧力かけてると思ったら、いきなりザン様来たよー!」

歩

「文句あるのかい。無いのかい。どうちなんだい」

妖精

「ああーーついには某芸人のパクリ来たあーー!」

歩

「つっこみは賛成とみなす」

妖精

「そんな法律聞いたことないよーーー!」

歩 「よし、じゃあ、じゃーんカーんホイ」

妖精

「あーーーーでホイ」

歩

「あーーーーでホイ」

妖精

「あーーーーでホイ」

歩

「あーーーーでホイ」

妖精

「あーーーーでホイ・・・・」

歩

「あーーーーでホイ・・・・」

妖精

「あーーーーでホイ・・・・」

どんな状況になつて いるかは、一人の台詞のみで、想像くださ
い。

歩

「あーいーでホイ・・・・・・」

妖精

「あーいーでホイ・・・・・・」

歩

「あーいーでホイ・・・・・・」

・

妖精

「あーいーでホイ・・・・・・」

・

歩

「あーいーでホイ・・・・・・」

・

妖精

「あーいーでホイ! ! !」

歩

「あーいーでホイ! ! !」

妖精

「a i k でホイ! ! !」

歩

「微妙な位置の歌手を出すなよ! あーいーでホイ! ! ! !」

妖精

「あーいーでホイ! ! ! !」

「ううせえ黙つてろ！ あーいーでホイ！…………」

歩

死ね！あーいーでホイ！！！！！！！！

妖精

「果てろ！！！ あーいこーでホイ！－！－！－！－！」

步

妖精

!

步

「うつせえ黙れや！ 王様殺しの汚名はお前だ！」あーいーで

h

「私がどうかしたのかね？」

一人の心の声

『ウワアアアアアアアイ王様だああああああ

』

曰で語っています：妖精

曰で語っています：歩

『ホラ、王様だよ。さつそと殺せよ』

』

『できるか 今ここでそんなことが出来る奴は、来世はトイレツ
トペーパーになつたらいいや 』

『…・…・…さうすんの、…』
『…で（以下略）…歩
『…』

：妖精

○YIN 自分で考え

步

何その無責任
わが子た
好きにしていいんだな

「王様」歩

「何だ？」

步

「死ね」

「 ま り の お つ れ ま が あ い わ れ た ！

0000000001%をしなこらでかうテ-----

あやめ せ あざわら とあざわらこねー。

最悪のパターンだよコレ。

あ！王様キレてる！－！－！

ちよ、まつ・・・・・・・・・死・・・・

第一回 おとぎの世界

ପାତ୍ର

あゆむに1000000000000000のダメージ！

あゆむ
は
ちからつきた

!

あゆむ の めのまえは まつくりになつた

一瞬で、私の意識は消失した。

かと思われたが。

人間の生命力といつのはすごいものだよ。

私、まだ生きてた。

おゆむの「ハガキ」

「うわ――や――ひ――れ――た――」

00000000のダメージ………

歩 「うそーん！…王様よわつ…」

妖精

「…………お前が言える」とじやないや。お前、あと。…でもくらつてたらしんでたぞ」

歩

「それにしても…ラスボスがコレじゃあ…

妖精

「バカ言え。まだだぞ」

歩

「な…………にいいいい…………つづづづ？」

？」

妖精

「せつからひっぱりうつたんだが…読者様もそろそろ飽きた頃だろ。じゃあ、次の作品をお楽しみに」

步

ルル

h

ながらくお付き合い、有難う御座いましたー
めちやくちや詰まんなかったと思いますが、これからもできたら
書き続けるつもりです。

では、またいつか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951d/>

ちょこで とりっぷ

2010年10月12日03時21分発行